

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03877

研究課題名(和文) 支援の社会学 「語れる主体」を前提としない支援実践

研究課題名(英文) Sociology of Support - Practice of Support That Does not Postulate the Subject's Willingness to Share

研究代表者

佐藤 恵 (SATO, Kei)

法政大学・キャリアデザイン学部・教授

研究者番号：90365057

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)： 犯罪被害者、神経難病・高次脳機能障害、自死遺児それぞれの事例において、当事者の苦しみとその支援について、ナラティブ・アプローチの立場に立った質的研究を進めた。支援者を当事者の物語の聴き手として把握することによって、「混沌の物語」への配慮と共感を基盤に据えることができ、また、変化をもたらす「スーパースター」は不適切・不要であることを認識できる。

本研究は、苦しみを容易には語れない当事者の状況に焦点を合わせ、語れるようになっていくプロセスや語りがかたまりやすくなるプロセスに注目する。従来の「支援の社会学」では研究の蓄積のあまりない領域をテーマ化した点に、本研究の社会的な重要性が存在する。

研究成果の概要(英文)： The author conducted a qualitative study from a narrative approach, regarding suffering of and support for a crime victim, an intractable neurological disease /higher brain dysfunction patient, and a suicide orphan. By treating the provider of support as the listener for the person concerned, we are able to create a basis of consideration and empathy for "the narrative of chaos." Furthermore, we are able to recognize that the "superstar" who brings about change is both inappropriate and unnecessary.

This study focuses on the situation of the persons concerned who cannot easily share their sufferings, and pay special attention to the process where they "gain the ability" to share, or where they "abort" the narrative. The study is of value to the field of sociology in that it recognizes and focuses on a field where little study has been conducted by the existing studies in "Sociology of Support."

研究分野：社会学

キーワード：支援 ナラティブ・アプローチ 犯罪被害者 神経難病・高次脳機能障害 自死遺児

1. 研究開始当初の背景

今日、支援が構想されるにしても、制度やしきみに基づく支援による「解決」に議論の主軸が置かれ、苦しみを生きる人々の経験や支援ニーズへの理解が置き去りとなりやすく、制度的枠組をつくることによって、<支援>が行き届かない当事者の苦しみがかえって看過されていくという問題が生じてきている。

このように、現代社会においては、その存在が知られていないわけではないが、制度・しきみという「箱」の整備が語られることによって、「(箱の)中身」の充填がなおざりになり、優れた技術や実践の紹介に専念するあまり、いまだなお残る苦悩が見過ごされるという社会的背景がある。

2. 研究の目的

本研究は、現代社会において忘れられ置き去りにされがちな人間の苦しみにスポットを当てる調査研究を行うとともに、<支援する側>と<支援される側>の関係性をとらえる理論的枠組を彫琢することを目的とする。

調査研究のフィールドとしては、犯罪被害者、神経難病・高次脳機能障害、自死遺児といった事例を主要なものとしている。また、理論枠組としては、「語る/聴く」関係性を中心としたナラティブ・アプローチおよび社会的相互作用論の拡張的展開を図る。

3. 研究の方法

本研究が採用する方法は、ナラティブ・アプローチを中心とした相互作用論的社会学であり、調査の方法としてはフィールドワークやインタビューによる質的研究である。

主要なフィールドを犯罪被害者、神経難病、自死遺族とした上で、調査研究から遊

離した机上の理論でもなく、調査対象の具体性やリアリティにのみ頼るのではなく、両者を突き合わせながら調査データと理論との間を絶えず往復する継続的な議論を展開し、社会学理論を彫琢していく点にこそ、本研究の特徴が存在すると考える。

4. 研究成果

犯罪被害者、神経難病・高次脳機能障害、自死遺児それぞれの事例において、当事者の苦しみとその支援のリアリティに関し、インテンシブな調査研究、なかんずくナラティブ・アプローチの立場に立った質的研究を進めた。

「支援の社会学」は、制度・施策という「箱」の整備に関する議論に終始するのではなく、むしろ制度・施策だけでは回復や自立が困難な当事者の生きづらさや、制度・施策からこぼれ落ちてしまう当事者の生きづらさに注目し、現場におけるミクロな支援実践に定位することが必要である。

「(箱の)中身」の充填の必要性については、制度や施策の議論からだけではなかなかその内実は見えてこない。また、制度・施策の整備が徐々に進んできている現在では、それに伴って「中身」自体も変化しつつあるわけで、それは現場における支援実践からこそ学ぶべきことである。

そのような視点を欠落させ、制度的支援による「解決」に議論が特化すると、苦しみを「今ここ」で生きる人々の困難経験やその支援ニーズが置き去りになり、制度的支援のみでは支援が行き届かない当事者の苦しみが等閑視されることにもなりかねない。現場の支援実践から離れないことによって、実際に制度や施策の中で生活する当事者の苦しみの経験、支援ニーズ、そして自立や回復のリアリティに接近することが初めて可能になる。

これは、制度的支援が重要ではないと言

っているわけではない。制度や施策の意義をふまえた上で、しかし、制度的支援による「解決」のみで当事者の自立や回復が達成されるととらえる傾向のある、我々の「常識」的な議論の一面性を問い直す必要があるということである。

そうした問い直しの一環として、本研究は、支援者を当事者の物語の聴き手として把握することによって、「混沌の物語」への配慮と共感を基盤に据えることができ、また、変化をもたらす「スーパースター」は不適切・不要であることを認識することができた。これらのことは、「支援の社会学」の構想において、とりわけ重要な意味を持つ。

本研究は、苦しみを容易には語れない当事者の状況に焦点を合わせ、語れる主体を前提にするのではなく、語れるようになっていく>プロセスや語りが<頓挫>するプロセスにこそ注目する。従来、支援に関する社会学では、研究の蓄積のあまりない領域をテーマ化した点に、本研究の社会的な重要性が存在する。

その上で、「聴く」ことと並んで、「つなぐ」ことや「巻き込む」ことも、当事者が語れるようになっていく>プロセスを構成し、当事者の苦しみの低減に資する支援要素となりうるという点も、本研究から得られた社会的インプリケーションである。

苦しみを生きる当事者の回復のためには、各種の専門的知識・技術・資源の動員が求められるが、そうした知識・技術・資源を、ピアや、あるいは一つの支援組織のみが内部に恒常的に抱え込んでいることはできない。とりわけ、自らも苦しみを抱えるピアが、そうした知識・技術・資源をすべて持ち合わせ、ピアのみで支援を担いきるということは困難である。よって、人と専門機関、もしくは人と人、人と支援制度を「つなぐ」ことを行い、シームレスな総合的支

援によって当事者の生活を支えることが重要となる。専門機関・人・制度を「ピンポイント」と呼ぶなら、「つなぐ」ことは、当事者とピンポイントとを媒介するという支援であり、「聴く」ことと並んで、本研究が支援の主要な「中身」として理解することである。

当事者の声を「聴く」ことを通して、支援のノウハウを発見したり、支援者自身の生き方や考えの振り返りが促されたりした場合、そうした支援者こそが、ピアと各専門機関との中間的存在として、当事者の声を「聴く」ことや、ピアと専門機関を「つなぐ」ことに精通したアドボケイトとなりうる。

このような、「聴く」こと、「つなぐ」ことに精通したアドボケイトとしての支援者は、必ずしもピアでなければならないというわけではない。むしろ、長期にわたる支援を実効的なものとしていくためには、一般市民を支援に「巻き込む」ことによって、支援に一定の社会的広がりを持たせることが大きな意義を持つのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 佐藤恵、被災障害者の困難とボランティア/NPOによる支援、現代社会学理論研究、査読無、11巻、2017、23-28

2. 水津嘉克・佐藤恵、生きづらさを生き埋めにする社会 犯罪被害者遺族・自死遺族を事例として、社会学評論、査読有、66(4)巻、2016、534-551

〔学会発表〕(計3件)

1. 佐藤恵、被災障害者・犯罪被害者の生きづらさとその支援、2017年度三田社会学学会大会、2017

2. 佐藤恵、大震災における障害者の生とその支援、第41回地域社会学学会大会、2016

3. 佐藤恵、被災障害者の困難とボランティア

ア/NPOによる支援、第11回日本社会学
理論学会大会、2016

〔図書〕(計1件)

1. 天田城介・渡辺克典(編)、青弓社、大
震災の生存学、2015、216(64-83)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 恵 (SATO, Kei)
法政大学・キャリアデザイン学部・教授
研究者番号：90365057

(2) 研究分担者

水津 嘉克 (SUITSU, Yoshikatsu)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：40313283

研究分担者

伊藤 智樹 (ITO, Tomoki)
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：80312924

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()